

K 5 3 次列車乗車記

2004/12/25-12/26



今回乗車する夜行列車は、2000年10月から運行が開始された北京～沈陽北を結ぶ快速列車である。北京を出て京哈線(京秦線)を一路東へ、秦皇島、山海関を通過し、遼東湾沿いを北上し(沈山線) 北の都、沈陽(満州国奉天)の玄関口である沈陽北站までノンストップで走る「直達快速(ZhidaKuaisu)」でいわゆるZ特快(ZhidaTekuai)のモデルとなった列車である。下り列車は北京～沈陽北駅間744kmを9時間10分で結ぶ。運賃は軟臥下段が276元(3,726円)である。

今回も沈陽北站まで一人旅である。



© Copyright 2005 T.Agura

北京站到夜9時過ぎに到着した。北京站舎は新年を迎えるためイルミネーションでライトアップされ、中国的造形の石造りの站舎が美しく浮かびあがっていた。

北京站正面「进站口」(入口)から建物に入ると中国のどの站もそうであるように先ず、手荷物のX線検査を受ける。大きな4個の荷物も今回は問題なく通過、そしてホール正面左右にあるエスカレータで2階へ上る。そこには、大きな電光掲示板があり、各列車の待合室を表示している。

私の乗車するK53次列車の軟臥待合室は第5候車室(5番待合室)であった。待合室といっても検票口(改札口)の横に椅子が並べただけの貧相な待合である。中国の場合、通常大きな駅だと軟臥や軟席用待合は立派な椅子が並んでいて静かなVIPルームといった感じがあり、非常に値打ちがあるがここ北京站の場合は通路と兼用であった。

発車半時間前の午後9:45、改札が始まった。狭い改札を重い荷物を引き摺り通るとホームに下りる階段がある。そこに立つと眼下に大きなカマボコ屋根の下に何本もの列車が並ぶドームが目に飛び込んできた。

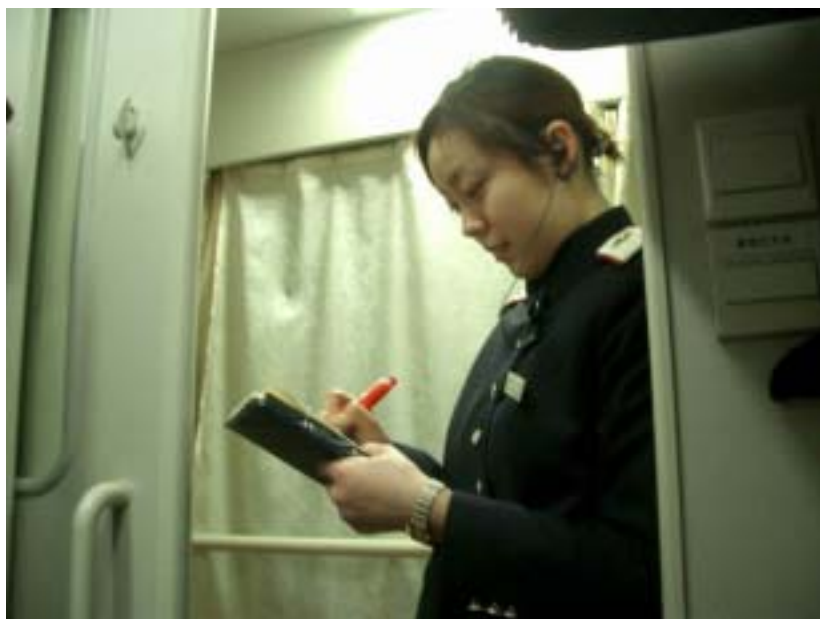


階段を下り、目指す「軟臥14号車5番」へ各車両の入口には、女性車掌が待機している。14号車入口で切符を渡し、席票と交換する。いわゆる「換票(ホアンピャオ)」である。

このホームは右写真のように中国国鉄の一般ホームより高くなっていて客車入口のあの高い階段を登らなくても中に入ることができ40kgの荷物を持った身には非常に助かった。

今回の客車は南車四方機車車輛製RW25G553587である。客車の狭い通路を通り、2つめのBOXに入る。席は「下鋪(下段)なのですべての荷物をベッドの下に滑りこませ、ダウンジャケットを脱ぎ、用意してあるサンダルに履き替え一休みする。





軟臥は、4人1部屋になっていて、4人が揃うとみんな喋り出した。話を聞くと1人は、沈陽にあるヤマハの代理店に出張だそう。30代の若いサラリーマンで10年前に浜松にあるヤマハに研修に行ったと話していた。もう一人は、沈陽に建設機械の販売に行くと話していた。あと一人は女性でこれも出張だった。正に日本でいう所の東海道線ブルートレイン「銀河」のような客構成である。

発車して20分ほどすると先ほどの車掌がやって来て身分証明書のチェックを始めた。それぞれ証

明証を出す。中国人は全てこの身分証明書を持っていてホテル、軟臥等はすべて提示が必要である。硬座や硬臥と違って軟臥はこの制度があるので非常に安全で安心である。

一人がテーブルにあるミルクとケーキを見て、ケーキの数が3つしかないのもう一つ持ってくるように車掌に話をした。車掌は、先ほど用意したはずなのに・・・と言ったが、口論は止めて後で持って来ますと言いつのボックスへと向かった。



このK53は今まで乗った夜行列車で最高品質とサービスであると思った。(たいしては乗ってないが・・・)

これが中国の列車かと疑いたくなる。

軟臥のテーブルには4人全員に朝食用にケーキ2個とミルク1パックが配られている。

また、洗面所には、ホテル並に歯ブラシセットが用意され、いたれりつくせりで本当に驚いた。



歯ブラシセット





夜も遅いのでみんなすぐにベッドに入る。
客車のベッドライトも最新式の白色LEDで調光が出来るやつであった。
おやすみなさい・・・・・・・・



車掌のノックで目が覚めた。「換票」である。席票と切符を交換する。時間は6時40分、カーテンを少し開け、外を見るとまだまだ薄暗い中、一面の雪景色であった。洗面所で身支度を済ませ朝食用に用意されているミルクとケーキを食べる。沈陽北站まであと10分であった。

携帯が鳴った。ガイドのO氏からである。沈陽北站で出迎えてくれる予定になっているが、站には出口が4つあるようで東側にある4番出口に出て来ててくださいとのことであった。

列車は日の出前の沈陽北站到7:25定刻通りに到着した。荷物が多いので一番最後にホームに下りる。

このホームは一般的な高さのため客車の階段を3段降りなければならない。荷物が多いのでこれが一苦勞だ。

先ず、キャリーバックをホームに居る車掌に渡し、大きな靴で階段を確かめながらゆっくりと降りた。車掌に礼をいい、「出站口」(出口)へと向かった。乗客が殆んどいない。非常に寒い。-20 ぐらいかな・・・



歩いて行くと目指す4番出口がない!ゴロゴロとバックを引き摺りながら100m行くと1番出口があったのでここを出ることにした。階段を下り、地下通路を右に曲がりスロープを上がっていくと1番出口に着いた。

出口の手前で駅員がこちらを見ている。嫌な予感・・・。目が合ってしまった。

近づくと思手招きするではないか!あゝ～ッ。これがこの旅第1回目のケチである。仕方なく駅員について左に曲がった。そこには、大きな「カンカン」があった。

荷物を全部載せる。重量オーバーだそうである。16元を追加で取られた。

出站口(出口)から外にでたが、ここは1番出口。ガイドが居るはずもない。他の出口を探そうかと電話しようかと考えていると站舎伝いにガイドが走ってきた。向うで待っていたがもう誰も出てこないで探しに来ましたと・・・!良かった良かった!。



つづく(沈陽蒸汽機車博物館へ向かった。)